

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次）

キトラ古墳周辺の国営公園整備にともなう檜隈寺の調査は最終年度を迎え、今年を中心伽藍の北側で6カ所の調査区を設定し、合計約1,500㎡を調査しています。

飛鳥の古代寺院の一つである檜隈寺は、渡来系氏族である倭漢（東漢）^{やまとのあや}氏の氏寺と考えられています。過去（昭和）におこなった調査では、渡来系技術の一つではないかと考えられている瓦積み基壇が講堂跡で見つかっています。そして今回の調査では、講堂の北西約25mの地点で、7世紀前半から中頃のものと思われる、石組のL字形カマドをもつ竪穴建物跡を確認しました。

通常のカマドが壁際に設置されるのに対して、L字形カマドとは、^な焚き口が室内に張り出し、さらに煙道を比較的長く壁沿いに這わせることで、その平面形がL字形や逆L字形であるものを指します。この種のカマドは日本では4世紀から8世紀に存在し、北部九州や近畿地方を中心に確認されています。また、朝鮮半島では日本よりも遡った年代のものが確認されることなどから、渡来系のカマドと考えられています。近隣の高取町では、やはり渡来系の技術と考えられているオンドル状遺構や大壁造建物跡が見つかっています。多彩な渡来系技術の遺構によって、檜隈寺はますます渡来系色を強くしています。

これまでの調査では、檜隈寺中心伽藍となる7世紀後半頃の遺構が主な成果でしたが、今回『日本書紀』に記される、遣隋使、百濟大寺の造営、蘇我氏邸（甘檜丘）の警備などで倭漢氏が活躍していた7世紀前半～中頃の遺構を確認できたことは大きな成果といえるでしょう。

（都城発掘調査部 黒坂 貴裕）



L字形カマドをもつ竪穴建物跡（南東から）